幻聴

高岡啓次郎

一章

気をまぎらわそうとテレビのスイッチを入れた。通り魔事件や、あおり運転、子どもの虐待事件があとを絶たないというニュースは仕事がらみで耳を傾けたが、クリスマスのイベントや賑やかな街のたたずまいが映ったときはチャンネルを変えた。どこもバラエティ番組ばかりだ。軽薄そうな笑いが飛び込んでくる。舌打ちしながらも私は思っている。一緒に笑えたらどんなに幸福だろうと。自分にもそんなときはあった。若い娘たちが箸の転ぶことにさえ笑いをこらえられないように、他愛もないことに生のきらめきを見出して感動していたことはあったのだ。だがそれも、今は遠い過去になってしまった。

幾らもしないでテレビのスイッチが切られ、風の音しかしない沈静した世界に私は落ちた。独りの部屋のスイング窓を少し開ける。いつの間にか外は粉雪がふりはじめていた。乾いたクシャミが出て、すぐに窓をしめた。今年の冬は異例な寒さが列島を襲っているという。もうすぐ終わる暦を見つめながら思う。今年は何と長い一年だったことだろう。神経をすり減らした医療裁判のあと三件の離婚訴訟を手がけた。親権と金銭が絡んだやりとりにはエネルギーを吸い取られる。それと並行して利息過払い請求に関する案件も多く、数字ばかりをながめていた。眠ってからも電卓の液晶画面が頭を去ることがない。それが来年も続くと考えると、食べたくない

ものを口にするときみたいに胃の辺りからどろりとした液体がつきあげてきた。私は洗面台に粘り気のある唾をはき、蛇口を勢いよくひねって流した。

年が明けた日の午後、冷たいフローリングの床にインターホンの大き過ぎる音が響いた。

「お父さん、明けましておめでとう。入るわよ」

笠岡に嫁いでいる娘が家に来た。私はガウンを着たまま髭も剃らずにソファーでまどろんでいた。いまだに目覚めない頭を背もたれに乗せていたら、合鍵で入ってきた娘の鮮やかな口紅が目の前に現れた。

「まだ寝ていたの？　もうお昼を過ぎたわよ」

「ああ、わかってる」

「あらあら、やっぱり散らかし放題ね」

娘は大きな袋をテーブルに置き、ニット帽とコートをソファーにかけた。殺風景な部屋に明るいピンクのセーターが忙しく動きまわる。テーブルの新聞をたたんだり、中途半端に開けたカーテンを直したりする。私があくびを押し殺していたとき娘は顔をのぞきこんできた。

「あいかわらず眠れないのね。目の下が黒いくまになっている。何とかしないといけないわね。市販の薬に頼ってはだめよ。考えられる原因はいろいろあるんだから。とにかく耳鳴りが治らないのは心配だわ。今日は何か食べたの」

「まだだよ。腹も空かんのだ」

「お父さんたら、何もこんなときに独りで過ごさなくたっていいじゃないの。年越しを一緒にしようと思ってご馳走をたくさん作ったのよ。うちの人も、なんでお義父さんは来ないんだっていうのよ。まあ適当に答えてはおいたけれど」

「すまんな、せっかく作ってくれたのに」

「今日もってきたから食べてね。今からお茶をいれるから」

娘夫婦のすすめに私が応じようとしなかったので、台所に立っている娘はいくらかの不満と心配を織り交ぜた神経質な顔を向けた。切れ長の目がいつもより吊り上って見える。しかしすぐに何かを思い直したように優しい眼差しになり、母親似のちょっと受け口の唇をとがらせた。

「ほんとにお父さんたら心配かけるわね。お願いだから病院に行ってちょうだいよ。お母さんみたいに手遅れになったらどうするの。最近ちゃんと食べていないでしょう。このあいだ作っておいたおかずが手付かずで残っているじゃないの」

娘は冷蔵庫に眠っていた容器をいくつも開けて古い食べ物を点検し始めた。半分ほどが捨てられていくのを見ていると娘への申し訳なさがあふれてくる。私は自分の痩せた腕を見ながら言いわけした。

「病院に行かねばならないとは思うけど予定が混みいってるんだよ。三月に行われる弁護士会のセミナーで講師をやってくれないかともいわれている」

「今年はどこでやるの」

「倉敷だよ」

「お父さんは五年前から広島に移ったじゃない。どうして頼まれるわけ？」
「長く岡山にいたからだろう。それに広島からも参加者はいる。けっこう地域をまたいで仕事をしているからね。みんな忙しくて講師を引き受ける人が少ないらしい。やるとしたら準備もしないとならない。それが終わったら一息つける。時間もできるだろうから行くようにするよ」
「時間ができてからって、お父さんはいつだって忙しいじゃない。岡山G病院に私の高校時代の友人が脳外科の医師をしていること前にも話したよね。あそこなら最新の設備が整っているから地方の患者さんも来るらしいのよ。電話を入れておくから行ってみたらどうかしら。きっと親身になってくれると思うの。頭に悪いものでもできていたらどうするの。三月に行くなんていわないでちょうだい」
話している娘の声が途中からかすかに震えをおびていた。眉間にしわがより、真剣な瞳に涙がにじんでいる。私はこれ以上だらだらと娘のすすめを無視するわけにはいかなかった。
「いま手がけている案件がもうすぐ片付く。そうしたら月末までには行くようにする」
「ほんとに行くのよ。なるべく早くしてね」
「ああ、そうする」
その日、娘はかいがいしく働き、掃除や洗濯をすませた。来たときとはちがって明るい表情になっている。四歳になった孫と子猫の写真をスマホで見せながら、いかに生意気になったか、幼いときから両親の弱みを見抜き、巧みに女の悪知恵を行使するかを面白おかしく話した。二月の二十日には妻の三周忌がある。自宅で十人ほどが集まる程度だが、娘が手配してくれるという。そのあと仏壇をきれいにし、線香の前でしばらく佇んでいた。
「おばあちゃんとお母さんの写真を見ていたら、血がつながっていないのに、なんだか二人は似ているよね。お父さんがお婿さんみたいに思われたでしょう」
「そう、よくいわれたよ。性格も似ていたし、ずっと世話をしてくれていたから周りはそう思ったのだろう」
「もう二人ともこの世にいない。過ぎ去った歳月って残酷よね。そして非情だわ。大切なものを連れ去って、ずっと遠くに引き離した状態で固定してしまうのだから。もう誰も過去を動かせないんだもの」
確かにそのとおりだと思ったが私は黙していた。
「お父さんは東京で弁護士になりたてのころにお母さんと知り合ったのよね。品川の病院にいたころのお母さんて、どんな感じだったの」
「容姿は普通だったけれど、ひときわ優しい看護師さんだったよ。仕事のストレスで胃潰瘍になっていたときだけど、精神的にも癒してくれたから」
「そのときお父さんは二十七歳だったのでしょう。ということは、お母さんは二十四のときか。出会ってからどれくらい経ってから結婚したわけ」

「翌年の二月だった。その年の十二月におまえが生まれたわけだ」
「東京で知り合った二人が岡山に来ることになったのはどうしてなの」
「父さんの知り合いの弁護士が岡山で新しく始める事務所を手伝ってくれといわれたからだよ」
「そういえばお母さんがそんなこと話していたことある。尾道の実家が近くなったから嬉しかったといってたよ。私は小学校の二年か三年くらいだったかな。なんとなく覚えているもの」
　私は娘に話しかけられるままに当時のことを思い出していた。妻は何かと理由をつけては実家を訪ねていた。九州や大阪にいる妹たちはめったに来ることはなかったという。娘が中学に入ったころ、妻は岡山市内の大きな病院に勤め口を見つけ、看護師として復帰した。ところが五年もしないうちに七十を過ぎた私の両親が東京の家を引き払って近くに越して来た。
　娘は手を伸ばして仏壇から写真立てを手に取った。
「お母さんて、すごく働き者だったよね。私はとてもかなわないわ」
「確かにそうだった。仕事を持ちながら夫と子どもの世話をし、同時に両方の親たちへ気配りしたり、何かと世話をやいたりしていたわけだ」
「すごいよね。けっこう介護も長かったんでしょう」
「股関節を痛めたおばあちゃんが介護を必要とするようになったのは七十八歳のときだから、亡くなるまで何年もだよ。看護師を続けながらだから大変だったろう」
　娘はスマホの時刻表示を見ながら、「そろそろ帰るわね。もう電車の時間が近づいたわ」といって写真立てを仏壇に戻してから身繕いして帰った。
　娘がいなくなったあと、部屋はすっかりきれいになっていた。それが何となく落ち着かない。雑然としていることに慣れてしまったからだろう。私はソファーにもたれたまま、けだるい追憶にふけった。
　妻が病院の仕事から離れたのは私の母がちょうど八十歳になってまもなくだったと思う。母の誕生日の祝いを近くの日本料理店で夕方早くにすませたあと、両親は私の家でゆっくりしていた。それから二時間後に母が亡くなることなど誰が予想しただろう。そのとき私はたまった仕事の続きをすませるために弁護士事務所に戻っていた。窓の外は紅葉した銀杏の葉が空高く風に運ばれている寒い日だった。
　そのとき緊迫した知らせがきた。
「お義母さんがとつぜん胸をおさえて苦しみだしたの。いま救急車を呼んだわ」
「意識はあるのか？」
「ええ、だけど話せないほど苦しがってる」
「すぐ行く」

慌てて事務所を出たが、その日にかぎってタクシーがつかまらず交差点を走り回った。三十分後に帰宅したときは、ＡＥＤでの蘇生措置が施されたあとだった。血の気の失せた母の前で私は絶叫したが、飛び去った命は戻らなかった。

このことが全員に与えたショックは計り知れず、元気だった父はすっかり体調をくずし、私はなかば放心状態で仕事が手につかず、妻は十五年勤務した病院をやめた。そのあと休むまもなく、すでに認知症のきざしが来ていた父の介護が待ち受けていた。外部の人がヘルパーとして家に入ることを好まなかった父は妻に全面的に頼った。

それだけではない。運命というものは非情なものだとつくづく思う。気落ちした人を休ませることなく次の手を打ってきた。妻が父の介護に時間を取られている最中に、尾道で独り暮らしをしていた妻の母親が風邪をこじらせて肺炎になり、入院してまもなく、あっけなく世を去ってしまったのだ。それからというもの、妻はひどく心を病んでひきこもりになってしまった。

妻のうつ状態は何年も続いた。父は施設に入ったが二年後に母の後を追った。そのあと私たち夫婦は故郷に帰りたいという妻の希望をかなえる形で尾道に移転して来た。私が還暦を迎えた次の年だった。当初は実家の平屋に住みたいといったが、そこはあまりにも老朽化していたので尾道水道が見える場所にマンションを買った。それなのに一年しか住まないうちに悪化した腎臓病がもとで妻は逝ってしまった。思えばもっと早くに連れてくればよかったのかもしれないと、後悔がよぎる。仏壇の前に膝まずき、線香に火を灯して妻の遺影に語りかけた。

「残酷で非情だったのは私かもしれない。歳月のせいにはできない。きみに母と父の世話を何もかも押し付けた。父の認知症に気づいた時点で専門の施設に入れるべきだったのだ。そうすればきみは病気にならなかったかもしれないし、尾道のお義母さんの世話にも行けただろう」

目を開けてから、うす茶色の線香の煙がときおり渦を巻き、筋になって上っていくのをいつまでも見つめていた。

二章

三月にアイビープラザで行われる若手法律家のセミナーで講師を勤めるという依頼についてはまだ正式に受けてはいない。今の状況で引き受けるべきか判断がつきかねていた。正直にいえば受けたくなかった。明日の午後にそのことで弁護士会から電話がくるという。毎年恒例になっている勉強会で三年続けて講師を引き受けてきたが、日々の生活そのものに支障をきたしている精神状態では避けて通りたかった。

妻の心の病がそっくりそのまま私に引き継がれてしまったのだろうか。周囲には正直に話すわけにはいかない。対外的なイメージから今後の仕事に差し支えてしまう。弁護士と

いえども顧客あっての人気商売であることには変わりない。ひと晩考えても断るための名案は浮かばなかった。幹事役のK弁護士から電話がきたとき、飲みかけていた栄養ドリンクを電話台に置いてこういうしかなかった。

「体調がすぐれないので今回はおことわりしようと思っている。岡山県には四百人もの優秀な弁護士がいるんだから、喜んで講師を引き受けてくれる人もいるだろう。思いきって若い人が教えるのも悪くはないと思うよ。いつも同じ人間が話すより、ときにちがう見方を学ぶのはいいことだからね」

「それがなかなか皆さん引き受けてくれないのですよ。数日間にわたって仕事を休まねばなりませんし、準備に費やす時間も必要です。講師料もあのとおり安いですからね。竹山先生がいつものように引き受けて下されば助かりますが、まあ無理にというわけにはいきませんよね。おかげんはかなり悪いのでしょうか」

「ひどいというほどではないが風邪を長引かせているせいか何となくふらふらする。まあ歳のせいもあるだろうが、めまいがして疲れやすいのだよ。尾道から電車に乗って、とても二日間の講義をまっとうする自信がないのだ。すまないが」

「竹山先生は長く医療裁判をかかえてらしたから、いまだに疲労がたまっているのでしょう。あれは残念な結果になりましたが、ぼくは個人的に先生のやりかたは正しかったと思っています」

「確かにあのときの疲れはある。きみだからいうが、弁護士としての自信がゆらいだのも事実だ。だからこそ余計に今回は気乗りがしないのだよ。あの裁判は大きく報道されたからね。私の講義など聞きたくない連中もいるにちがいないよ」

「そんなことはありません。ぼくの周囲には先生を悪くいう法律関係者はいませんよ。先生が長年にわたって地道な闘いをしてこられたことはみんな知っています。気になさることはありませんよ。まあ、体調のことについては確かにご無理をかけられませんが、それでしたらどうでしょうか。二日間の講義がご負担でしたら一日、いいえ半日だけでもけっこうですからお引き受け願えませんか。お願いします」

　私は受話器を持ったまま黙っていたが、だんだんK弁護士が気の毒になってきた。

「半日だけでもいいのかい」

「ええ結構ですよ。とりわけ青少年犯罪と冤罪に関する先生の講義は若い連中に絶対聞かせたいですから。ホテルも特別の部屋を用意させますから何とかお願いします」

　中堅のホープとして知られるKは、体育会系の大きな肩幅とエラの張った顎をもつ四十代の弁護士で、体格に似合わない繊細な優しさをもっていて、いつも面倒な段取りを嫌な顔ひとつせずにそつなくこなしてくれる。考えたら私も彼のサポートがあったから続けてこられた。講師を務めたおかげで仕事が幾つか入ってきたのも事実だった。その人懐っこい声に押し切られ、「わかったよ」とこたえてしまった。

「引き受けて下さるのですか」

「何とかしましょう。君の熱心さには敬意を表するよ」
「ありがとうございます竹山先生。感謝いたします」
「一日いっぱい立っているのが辛いから、午前か午後の部にふり分けてくれるなら二日間やってもいいよ」
「ほんとですか。よかったあ。これで今年の勉強会も成功まちがいなしです。何でしたら金曜の午後に車でお迎えに行きましょうか」
「きみは浅岡だろう。わざわざ来なくてもいいよ。大変な距離じゃないか。電車で行くから心配ない。私の家から駅は近いから気づかい無用だよ。そのかわり聞いてもらいたいことがひとつある」
「どうぞ何なりとおっしゃって下さい」
　私は講師としてどうしても組みたくない二人の名前をあげてそれを承諾させた。弁護士仲間にも厳然と派閥やグループ競争が存在する。そうした考えをむき出しにしている連中とは肩を並べたくなかった。それはわがままな要求かもしれないが、今の精神状態ではぎりぎりの条件だった。
「それなら大丈夫です。先生のお気持ちはよくわかります。ほとんどの仲間は事情を知っていますから心配ありません。あの裁判は上告すれば流れは変わったかもしれませんが、やはりあの場合はやむをえないのでしょうね」
　先方の同情ともとれる言い方には気恥ずかしさを覚えた。喉もとまで詳しく事情を説明しようと言葉が出かかったが、それをのみこむ。今さら話してどうなるものでもない。Kは候補として数人の名前をあげたが、それには異存がなかった。
「とにかく引き受けていただいて助かりました。私も幹事をやるのは三度目ですが講師の先生さえ決まれば半分は成功したみたいなものですから嬉しいです」
　Kは、はずんだ声で大げさなほど喜びを表した。電話を終えて受話器を置いた私はめまいに襲われてソファーに倒れ込んだ。横になっていると、失望させられた広島での案件が生々しく思い出される。六十代の男性が医師の誤診によって治療がいたずらに長引き、肝臓疾患がひどく悪化してしまった。患者の側に立って起こした訴訟は長引いたが、結果として私は手痛い敗北を味わった。
　その町で名士とみなされていた病院長は資金力にものをいわせて東京から大弁護団を呼んで万全の体制を敷いた。そのとき近隣から二人の弁護士が加わったが、そのうちの一人は古くからの友人だった。若い時に同じ法律事務所で汗を流し、家族ぐるみの付き合いをしていた仲だったのだ。病院長が弁護団の来る前にしたことはカルテのあきらかな改ざんだったが、それを裁判の場で立証することができなかった。彼らは有力者を味方につけて患者の訴えを力ずくで葬り去った。
　やがてその患者は、手遅れの肝臓病がもとで、敗訴の知らせを聞いてすぐ亡くなった。私は自分の力不足に打ちのめされた。正義を立証できないまま依頼主を死なせてしまったのだ。多額の裁判費用が遺族に残され、私に対しては一部の人たちからあからさまな非難があった。だが落胆の理由はそ

れだけではなく、最も親しいと思っていた友人を失ったことも少なくない傷を心に残した。腹立たしさと屈辱感が何かにつけて思い出される。それをずっしりと心に引きずっている私はマスコミに対してさえ信頼を失いかけていた。

ひどく喉が渇いた。身を起こして電話台にある飲みかけの栄養ドリンクを手に取る。そのとき後頭部に痛みを感じ、耳の奥のほうに金属的な響きが走った。そのままの姿勢で、もう一方の手の指で目頭をおさえてからドリンクを飲みほした。息がつまるので窓を少し開けてみる。冷たい風が目頭にしみ、ほほを刺した。頭痛は去らないが不快な金属音は少しやわらいできた。窓を閉め、足りなかった睡眠を取り戻そうと目を閉じると、青白い残光がちぎれて動きだし、回転する。余計にめまいが増幅しそうなので目を開けて大きく息を吸った。

もの憂い気分とは対照的なほど澄みきった空があり、眼下には明るい陽射しを受けた青い帯がある。尾道水道は今日も生き生きと脈動しているようだった。体のすみずみに感じるこの重さは何だろう。私は生きることに疲れていた。いちいち空気を吸い込まなければ機能を停止してしまう肉体そのものが煩わしい。このまま体が飛散して、空気か水の一部になれたらいいのにと思う。闘いから降りたい。うんざりするほどの長い旅路は、そろそろ終わりにしたい。そんな願望が確実に強くなっていた。

私はときどき襲ってくる耳鳴りが死と関係があるように思った。人生を終わらせたいと考えはじめると急に周りの気圧が下がったようになり、ツーンと耳を引っ張られる感覚が走るのだ。それは機上に身をおいた誰もが経験するものと酷似している。そのあと決まりごとみたいに、どこか地下深くで金属を削っているふうな音が聞こえ、さっきもそうだったが、目を閉じると光の粒が落ち着きなく飛び散っている。

軽いめまいや頭痛は若い頃からあった。裁判のための書類づくりで何日も徹夜が続いたあとや風邪をひいたときなどだが、最近の症状はまるでちがう。幻聴と死への衝動は表裏一体となって襲ってくる。その頻度は確実に増しているような気がした。

それから数週間が経って娘から電話がきた。

「お父さん、まだ病院に行ってないでしょう。もう二月に入るのよ」

「どうも大病院というものに体が拒否反応を示すんだ」

「どうしてなの。看護師だったお母さんと結婚したのにそんなこというの変だよ。前はそれほどでなかったよね」

「実はおまえに詳しくは話していないが、父さんがつくづく病院にいやけがさした理由があるんだよ」

「わかるわよ。あの裁判のことでしょう。お父さんが何もいわなくても報道されたから知ってるよ。仕方ないじゃない。お父さんのせいじゃないんだから。あそこの病院のやりかたは悪辣だと私も思う。だからって他の病院全部を否定したらはじまらないわ。時代の逆行よ」

「もちろん父さんだって医学界全般を忌避しているわけではない。立派な医師がたくさんいることもわかっているさ。しかし父さんは今回のことで営利法人としての病院組織や医師会の一部の人間に失望したのは確かなんだ。法律家のあるべき姿にさえ疑問を持っている。本当は有罪の人間を無罪にするのが正義なのだろうか。そんなことをするために苦労して勉強し、資格を取ったのだろうか。今はさまざまな面で確信がゆらいでいるのだよ」

「それってどういうことなの」

「こんど話す。それより三周忌の用意はどうなった」

「親戚には知らせたし、仕出し屋さんにも頼んだわよ。全部で十三人になる。玉野の叔母さんが早い時間にお花を持ってきてくれるって。お寺さんは二時に来ることになってる」

「全部やらせてすまないな」

「いいのよ。私は前の日に行くから。一日かけて家を磨き上げるつもり。お父さん元気出して。私も頑張るからさ。お母さんが亡くなって寂しいと思う。でもお父さんは独りじゃないよ。うちの人が、いつだって笠岡に来てくれていいといってくれてるんだから」

「ありがとう。気持だけでも嬉しいよ」

胸が熱くなった。電話を終えたあと、私は不覚にも仏壇の遺影を見ながら泣いてしまった。時間が経過するにつれて自分の罪の重さが身にしみてくる。私は何もかもを妻に押し付けて家庭から逃避していたのだ。だから妻の体調の悪化にも気づくのが遅かった。尿毒症を起こしたときも地方にいて娘にまかせっきりだったし、そこでの難しい裁判のためにとうとう臨終にも立ち会えなかった。しばらくのあいだ娘とも険悪な関係になった。三十三年連れ添った妻との死別は、あらゆる面で私の道を閉ざした。

短い二月はすぐに半ばを過ぎ、二十日になった。あれから二名の追加があり十五名で妻の三周忌をすませた。親族が全員帰ったあと、風邪をひきかけていた孫娘は娘の夫に連れられて一足さきに笠岡に帰った。娘は改めて仏壇の前で手を合わせたあと、向き直ってから哀願する口調で話し始めた。まるで後ろにいる死者から力添えを得ているみたいに眼差しには強い光があった。

「お父さん、今日はお母さんの前で約束してちょうだい。もう時間をおいてはだめ。仕事にかこつけるのはやめてちょうだい。とにかく頭だけは詳しく診てもらったほうがいい。腫瘍でもできていたら手遅れになってしまうでしょう。明日早くに電話を入れておくからそのつもりでいて。N先生の担当日時も聞いておくから」

言葉をさしはさむ余裕も与えなかった。娘のおさえた低めの声は威厳さえ漂っている。黒服というものは語り手にこれほど説得力を与えるものだろうか。有無をいわさぬ迫力があった。仏壇の奥から亡くなった妻も娘と同じような顔をして見つめている。私は意地を張るのをやめることにした。亡き

妻を後ろ盾にした娘の礼服をまとった姿は、どんな法服よりも私に対して権威があった。「来週にでも検査してもらうよ」と私はいった。

三章

週明けの火曜日、朝早くに家を出て岡山行きの電車に乗った。N医師が担当する日に合わせてG病院を訪れたのは午前十時を過ぎていた。医師は娘と同じ年齢だというが、少し猫背ぎみで毛髪がうすく、年齢よりずっと老けて見える。だが話す声はアニメの声優が出す少年の声みたいだった。

幾つかの質問を受けたあと、まずは隣にある耳鼻科の検査を受けるようにいわれて小一時間ほどを費やした。それから同じ場所に戻って、N医師によって脳に関するさまざまなテストが行われた。片目を閉じての直立姿勢や、体じゅうに先の丸い針のようなものを刺しては感じるかどうか聞かれた。両目を閉じてまっすぐに手をのばし右手の指と左手の指を合わせることも検査のひとつだった。

脳波とMRI検査が終わって再び診察室に行った。たくさんの人が廊下で待っていたが、娘が事前にコンタクトを取ってくれていたせいか、私はほとんど待つことがなかった。N医師は最初の対面のときより打ち解けた表情を見せた。ときおり笑みを浮かべながら説明を始めた。

「まず耳の検査結果からお話しますと、耳鳴りの原因になるような異常は見つかりませんでした。少し耳垢がたまっていましたが、それは特に関係ありませんから、こちらの方はまずパスしたと考えていいと思います」

私は無言で説明を聞いていた。N医師は別のファイルを開きながら身を乗り出し、脳を輪切りにした写真を何枚も投影ボードに貼り付けた。

「この映像を見て下さい。このとおり血管の流れはスムーズです。こちらの映像も気になる箇所はありません。血管が細くなった部分が数ヶ所に見られますが、それは六十五歳という年齢からすれば、とりたてて問題視することもないほどのものです。ご心配ありませんよ。半年か一年ごとに検査すればリスクは避けられるでしょう」

私は口角を少し上げて医師の説明に安堵したようによそおったが、内実は逆だった。より大きな不安が頭をもたげていた。どこか見えない別の場所に深い淵があって、そこに未知の魔物が隠れているのではないかという恐怖だった。それこそが最も恐れていたことだ。私は言葉を失って下を向いた。

私のさえない表情から若い医師は抱いている危惧を感じとったにちがいない。うなだれた患者を気づかう視線を投げかけ、何かを考えているふうだった。おもむろにファイルを机に置いて、腕を組んではまたはずし、落ち着きのない素ぶりを見せたあと口を開いた。

「竹山さんにとっては不本意かもしれませんが、念のために

心療内科のほうも受診なさってみることをお勧めします。今はわりあい気楽にみなさん行かれますよ。カウンセリングを受けるだけでも手がかりが得られるかもしれません」
「心療内科ですか。どうかな」
生半可な返事をすると、医師は食事や睡眠の程度など、差し障りのない質問を投げかけた。妻との死別いらい十分な睡眠をとっているとはいえないことをありのままに説明した。どこか不安がつきまとい、ちょっとした風の音にも目が覚める。ときおり冷蔵庫の振動がしただけでびくりとする。かといって静か過ぎるとまた落ち着かないという話をした。
診察室を出たあと時計を見ると正午をとっくに過ぎていた。結果を娘に電話しようかと思ったが、原因がつかめない今は伝えるべき材料がないように思われた。もういちど時計を見る。午後の診療まで時間があった。今日は午後からの仕事もはずしてきたから、N医師のすすめにしたがってみようかと思った。
一階のロビーには売店があって簡単な食事をとれるようになっている。だが何も食べたくなかった。少し早くても待っていようと思い、自販機から温かい茶だけを買った。心療内科のある病棟に向かったが、自分の意志とはうらはらな気持を抱いて歩いていた。いつも他人の相談に乗る仕事をしているのに、医師に自分の心をさらけだすことには恐怖に近い思いがあった。そんな性格は遺伝子に組み込まれていたように思う。私はつとめてゆっくりと長い通路を歩きながら思い出していた。福岡から東京の大学に進んだ父親は生真面目な高校教師だった。遊んでもらった記憶はほとんどない。寡黙だが、いったん議論になると「ようするに」という前置きを皮切りに自説を延々と説く。それには周囲が辟易するほどだった。だが、好きではなかった父の特性は弁護士としての私にも受け継がれているかもしれない。
祖父はさらに厳格さでは上をいく地方裁判所の判事だった。私が将来は自分も法律の勉強をしたいのだといったとき、佐賀出身の祖父からこういわれたことがある。
「男は誇りと気位をたえず持ち歩くべきだ。人前で泣くことはけっしてあってはならず、気やすく謝ることはもってのほかだということを覚えておきなさい」
硬い祖父からすれば人前で笑うことさえ恥のように思っている部分があった。晩年はあまり口をきいた記憶がない。火鉢の前で悠然とキセルをくわえながら難しい本を読んでいた姿がやきついている。私が大学を卒業した年に祖父は亡くなったが、死ぬ直前まで法律書の横に武家の聖典ともいわれる葉隠(はがくれ)をお守りみたいに枕元においていた。私はそうした祖父を敬遠しながらもどこかで尊敬していたから法律の道にたずさわるようになったのだと思う。
祖父や父の意固地なまでに内面を表に出そうとしない性格は私にも受け継がれている。しかし私は二人のように心が強靭ではなかった。父に甘えられない反動が何かにつけて母に頼り、慕うことに現れた。それはさまざまな形で日常生活を

支配した。自然な情愛がどこかで欠如していた父のかげで、母がどれだけ泣いていたかを私は知っていた。

だから母が亡くなってからというもの、生き残った父に私はどこかで軽い復讐をしていたのかもしれない。母に対するような優しさを示せなかった。介護が必要になってからも自分は逃げていた。そのひずみが妻の命を縮めたのだろうか。私はもしかしたら父以上に責めをおうべき生き方をしてきたような気がする。やっかいな法廷闘争を幾つもくぐり抜け、それなりの尊敬を得てきたはずだが、今はその自信が大きく揺らいでいる。私は自分に嫌気がさしていた。もっとも付き合いたくない人物になっている。もうこんな男との関わりをやめたいと思う。

心療内科のある病棟に向かっていた私は、いつの間にか立ち止まって窓辺にいた。考えることを中断した途端に外の景色が見えてくる。水かさを増した旭川が悠然と流れており、病院がそのほとりにあることに今さら気づいた。再び歩き出して、どこまでも続きそうな長い通路を進んだ。途中から壁や床がきれいになった。建増して間もない建物だろうか。新しい建材やペンキの匂いが残っている。

曲がり角のコーナーに貼られた衝突防止の大きな鏡の前を通りかかったとき、私は息を止めてしまった。自分のあまりに憔悴した姿に打ちのめされたのだ。ひどい顔だった。ナイフで刻んだような深い眉間の皺。下まぶたにできた不健康な膨らみ。垂れた前髪のあいだから覗く死んだ魚のような目。かすかに震えているささくれた唇。皮膚は自分でもゾッとするほど不気味に蒼黒い。その異様さに愕然とし、歩き続けてゆく力さえもが失せてしまった。その不健康さは醜悪な自身の内面そのものを露呈しているように思われた。へたりこむようにして近くにあったカウチに腰かけ、数分後には家路についていた。

意味不明な幻聴は一向にやむことがなかった。風の音が耳について離れずにいつまでもつきまとったり、夜に鳴く野鳥の声が夢の中にまで現れて、どこまでも追いかけてきたりする。私が恐怖をいだいたのは、日が経つにつれて不明瞭だった音の羅列が人間の声の断片として聞こえてくることだった。そんなおりに、誰かが聞けば奇怪と思うにちがいない経験をすることになった。

それは三月の中旬だった。そのとき私は尾道から電車に乗って倉敷を訪れていた。場所はアイビープラザで宿泊場所も同じだった。約束していた二日にわたる法律セミナーの講師のつとめは心配するまでもなく無事に終えることができた。二日目の時間が例年より短縮されたせいもあって身体的な疲れは軽いものだった。二十人ほどの若い法律家たちは三人の講師を通して学んだことから手応えを得たようだ。

私の医療裁判における敗訴のことは今回のセミナーに影響をもたらさなかったかに見えたが、誰もがつとめて話題をさけていたようにも思えて胸のなかに疼くものがあった。私は

気を晴らしたかった。その日の午後、帰宅する電車の時間をずらし、小雨の中、傘をさしながら歩いた。行き先は川沿いにある大原美術館だ。建物が見え始めたころ、雨は急に大降りになり、私は駆け込むようにして濡れしぶきで光る石畳を通り抜けて古い洋館の前に立った。宝物を守る門番みたいな二つのロダン像の前で建物を見上げると、傘の影からローマ式の巨大な柱が黒い雲を背景にしてそそり立っていた。楼門をくぐり抜けて備え付けのボックスに傘を置いた。光がやわらかくなり周囲は異質の空気につつまれた。

おびただしい数の偉大な美術品の中に足を踏み入れた。もう長い年月ここを訪れたことはなかったし、一人で来るのも初めてだった。十年ほど前に来たときは、何人もの地方から訪れていた弁護士仲間を案内し、彼らを接待する役目を担っていた。そのときは作品に注意をはらう余裕もなく、美術館の中を忙しく通り過ぎた。今日はゆっくり作品を眺めてみたい。そう思ってホテルを出たのだが、幾らもしないうちに意図はくじかれた。数日前までくり返し私を悩ませていた抑うつ状態が、再び強い波動をともなって襲ってきたからだ。

それは美術館に足を踏み入れてまもなく訪れた。入ってすぐの場所には、ブルーデルが彫った大理石のベートーベン像が置かれている。それは瞑想しているか、死んでいるか、そのいずれにも見えるのだが、とても幸福な人間とは思えない苦渋に満ちた顔をしていた。そのことが妙に私をかき乱した。いつもとちがう胸騒ぎがあり、自身の中で横たわっている良心を突き動かす疼きが浮かびあがっていた。

そのとき訪れた変調の兆しは、このあと起きることの前奏曲となった。名品を静かに鑑賞しようと思って来たはずなのに、ほとんどの作品が妨害電波によって乱された画像を見るように苛立ちとざわめきが視界を妨げ始めていた。私は機械的に歩き、作品が何ら目に焼きつくこともないまま通り過ぎた。気づいたとき、無意識に階段を上がり二階展示ホールに来ていた。私の心はここに来る前とはちがって重く打ち沈んでいた。

雨に濡れたズボンの裾から冷え冷えとしたものが体に伝わってくる。居心地の悪さをおぼえながらホールを歩いた。もう帰ろうと思って会場の出口に向かったとき、隅にひっそりと架けられていた一枚の油絵に目が注がれた。階段の踊り場に足を一歩かけたところでくびすを返し、引き寄せられるように進んでその絵の前に立った。

やわらかな照明の下にそれはあった。というよりも、その人はいた。壁の中から現れたみたいに女は存在していた。もう若くはない。三十歳はとっくに過ぎていると思われる。暗いパープルグレーの色調の画面の中に体をくねらせながら頬杖をついている姿を描いたものだったが、なぜかその絵は私の心をそのまま表現した作品に思われた。大群集の中から自分と似た人物に出会ったという衝撃を受けた。

それはカリエールの『想い』と題する作品だった。女がいる場所は黴臭い陽の当たらない精神病棟だろうか。あるいは

霧に包まれた墓地にでもいるのだろうか。漂う陰鬱な雰囲気は女が尋常な精神状態ではないことを推測させる。私の視線は画面に釘付けになった。黒っぽい服を着たほっそりとした女が物思いにふけっていた。

その思索の中にあるのは絶望の論理ではないだろうか。透けるように白い肌には蒼白い血管が浮き出ている。通う血液は凍っているのではないかと思わせる。ほつれた髪が知的な広い額に垂れさがっている。この女は自らが蓄積した情報と知性によって身を滅ぼしたのではないかと私には思えた。

答えの見つからない女の想念は、おそらく渦をまいて頭を駆けめぐり、その重さに耐え切れずに腕で支えているのではないだろうか。謎めいた表情と不可解な背景は人間の内面に横たわる闇の具現ではないかとも考えた。その肖像が誰をモデルにして描いたものなのかを、とりたてて知りたいとは思わなかった。しかしその陰鬱な世界に異常なほど私は惹きつけられていた。

いつまでも見入っていると、急に気圧が下がったときのような例の耳鳴りの前兆がきた。ついで足もとの大理石から足の骨を通って金属音が伝わってきた。めまいを誘う音は強く、こめかみを両手で押さえねばならなかった。私はいたたまれなくなり、急いで会場から出ようとした。しかし足は金縛りにあったみたいにそこから立ち去ることができなかった。

そのときかすかな声がした。それはどこか遠くから、回線の悪い電話を通して伝わってくるのと似た音質で、途切れ途切れに聞こえてきた。私は美術館の見学者たちを見まわした。しかし誰も近くにはいない。明らかにその声は絵の中から聞こえてくるように思えた。やがて意味不明な言葉の羅列が呻く女の声になっていた。

「助けて。私を助けて」

「誰だ。おまえは」

「あなたの目の前にいるでしょう。お願い。助けてよ」

「どうしたというんだ」

「明日からどうやって生きていけばいいというの。もう売るものが何もないの。あるのは私が身につけている耳輪とブレスレットだけ。主人と子どもを同時に疫病で亡くし、この町には友人もいない。私にはもう生きてゆく力が残っていないの。私を助けて」

すがりつく声は延々と続き、やがて深い井戸の中で話されているような反響をともなって聞こえはじめた。こめかみを押していた手で耳をふさいでも、内耳を振動させる音は消えなかった。続いて目の奥が痛んできた。瞼をしばたたかせるが涙は出てこない。目の表面に透明な何かを貼り付けられたような違和感をおぼえたとき絵が動き出した。明確に描かれていないはずの背景にさざなみがたった。どよめく海から体じゅうに赤黒い発疹をもった群集が現れた。

悲鳴があがった。断末魔の叫びをあげながら群衆はのた打ち回っている。私は思わず目を覆って顔をそむけたが、どんなに抗ってもその井戸の深みから抜け出られそうもなかった。

理性を呼び覚まし自分に起きていることの意味を知ろうとした。しかしどう考えても、それらが空想によって生じたものか、何らかの神秘体験によるものかわからなかった。しかしさらなる驚愕がこのあと私を襲った。女の声が聞き覚えのある音声に、死の世界に下ったはずの妻の声になっていた。

「私の気持をあなたは理解して下さらなかった」

「どうしてそんなことをいうのだ」

「どういってもわからないでしょう。あまりにも結束が強いあなたとお母様との間で、どれほどの孤独の淵においやられていたことか。あなたはいつも私とお母様を比べていた。軽い舌打ちと、沈黙の中にある不満は絶えずつきまとう蜂になって何度も私を刺したのよ。あなたは家庭から逃避し、自分がいないことを埋め合わせるための、みえすいた贈り物をした。でもこの耳飾りも腕輪もいらない。もうお返しする」

「どうして昔のことをむし返すのだ。それはきみの思いすごしだよ」

「思いすごしなんかじゃありません。あなたはきっとどこかで私を疎み、恨んでいたのよ。うちに来ていたお母さまが庭で胸をおさえて倒れたとき、私が経験を積んだ看護師でありながら何の手当てもできないまま救急車が来る前に息をひきとったことを根に持っていたにちがいないわ。そのあと逃げるみたいに私にお父様の世話をまかせっきりにしたでしょう。どんなに疲れていてもあなたは助けてくれなかった」

「だから仕事をやめたらどうかといったんだ。生活費は俺が稼いでいたんだから」

「私は看護師としての仕事に誇りを持っていたの。私なりに目標はあったのよ。弁護士の仕事が重要なのはわかるけど、私の仕事だって同じくらい重要なんだから、勝手なこといわないで」

その抗議の強い口調に私はたじろいだ。

「そうだな、その言葉は撤回する。配慮が足りなかった」

「今さら撤回されても遅いわよ。いずれにしてもあなたは家でゆっくり落ち着いていたことはあまりなかったよね。食事が終わるとすぐに書斎に閉じこもってしまうし、そのまま寝室に来ないで寝てしまうことも多かった。私のことを疎ましく思っていた証拠よ」

「そんなことはない。俺はおまえを疎ましく思ったり恨んだりしたことなどない」

「嘘よ。あなたがお母様を失ってから私を非難がましい目で見ていたことに気づかなかったと思うの？　私がやっと手に入れた副師長の仕事を退いたのも、あなたのどこか冷たい、他人を見るような視線に耐えられなかったからなのよ。打ち砕かれたわ。お母様を救えなかった私は生きている価値さえ失ったのよ。私は事実上もうとっくに死んでいたの」

「俺もあのころはどうかしていた。こみいった案件で眠れない日々が続いていたこともある。どうか許してくれ」

「結婚してから、あなたのスケジュールは常にこみいっていたわ。私が死の床についているときもそうだった。どんなに

呼んでも、あなたは傍にいてくれなかったわね」
「……」
「でも私は謝りたかったの。私自身にも野心はあった。看護師として大病院で成功する望みがあったから無理を承知で仕事をやめなかったわ。だから家のことに心をこめられないことも正直あったわよ。お母様やお父様に十分なことをしたとは思っていない。私は死の眠りにつく前に、あなたに伝えたいことがたくさんあったのだから」
「悪かった。何もかも重荷を背負わせて俺は逃げていた。きみには本当に寂しい思いをさせたと思う。すまない。どうか、どうか」
「もういい、許してあげるわよ。あなたにもいろいろあったのよね。生きているときはあなたを理解してあげなかった気がする。私も考えすぎる性格だった。その点はあなたとそっくり。この重い頭の中を軽くしたい。死んでさえ私は生きているような錯覚をいだくことがあるの。おかしいでしょう。やり直したいことが今になって次々と浮かんでくる。でももう無理みたい。私はあなたの周りにある空気をゆらすことくらいしかできないのよ」
　肖像画の女が唇をゆがめて不気味に笑った。私の心臓は哀しみで張り裂けそうになり、体内に宿るエネルギーのすべてをふり絞って何もかもを終らせてしまおうと考えた。駆け出そう。空いている窓はないだろうか。長い戦いを降りる時は来たのだ。

四章

「先生、先生、竹山先生」
「あ、きみか」
　気がつくと、セミナーに参加していた新任弁護士Mが立っていた。大学を卒業してまもなく司法試験に受かったという岡山市の青年だが、長身の体から発する低い声を聞いて私は夢から覚めたようだった。
「今回は参加させていただいて本当に勉強になりました。ところで、先生も美術に関心がおありなのですね」
「それほどないよ」
「でもずいぶん熱心に見ていらしたじゃないですか。何か批評を加えていらしたように見えました。三度も呼んだんですよ。絵の世界に没頭していらっしゃいました。先生はこの道にも詳しいんだなと思いましたよ」
「すまなかったね。少しぼーっとしていたよ。詳しいなんてとんでもない、この世界のことはほとんど知らないよ。今まで法律書ばかりに囲まれてきたからね。気晴らしで来てみただけさ」
　そのときの私は、とても気晴らしをしているとは思えない暗い表情だったろう。Mは声をかけたのが悪いと思ったのか、いくぶん申し訳なさそうに言葉をついだ。

「ぼくはセミナーに参加するにあたって十年間の判例を自分なりに調べてみました。裁判員制度が始まって十数年になりますが、日本の裁判は本当に向上したといえるのでしょうか。僕には下されている刑が以前より重いものが多いので気になるのです。一般庶民の常識が役立つのは確かだと思うのですが、報道をはじめとする周囲の世論に影響されやすいのも事実ではないかと思うのです」

そういってMは若いのに薄くなった髪を気にするように撫で、お辞儀をして立ち去った。Mの言葉で、急に現実に引き戻されたわけだが、それは私にとっては救いだったのかもしれない。最近の精神的な落ち込みがかなり深刻さを増していたのはわかっていた。猛スピードで走る車の前に飛び出す自分を想像し、マンションから尾道水道を眺めながら、吸い込まれるほど下を見下ろして、血だらけに頭を割って倒れている姿を想い描くことがあった。思えば今日の変調はただならぬものだった。大きな窓が開いていたら飛び込んでいたかもしれない。この青年に出会わなければ、このあと自分がどうしていたか考えると身がすくむ思いがする。

得体の知れないシンドロームからの脱出――。

私はこのとき、自分を暗闇に閉じこめている巨大な淵から抜け出したいという、あえぎに近い望みをもった。

尾道に帰ったとき、珍しく自分から娘に連絡をとった。孫娘が電話に出ていきなりいった。

「おじいちゃん、いつリカのところにきてくれるの」

「ああ、こんど行くよ」

「こんどっていつ？　リカ、おじいちゃん大好きよ。リカが描いたおじゃる丸の絵を見にきて」

「おじゃる丸ってなんだい」

「ようせいさまよ。カズマくんと子鬼トリオといっぱいおもしろいことするの。すてきな所にもたくさん行くの」

「じいちゃんはさっぱりわからないが、こんど教えてもらうかな」

「うん、教えてあげる。ようせいキャラはおもしろいのよ」

幼子にしてはませたいい方をする。私は笑っていた。

途中で娘が受話器をとった。

「おしゃべりでしょう。一日じゅうあの調子よ。誰に似たんだか。お父さん、倉敷でのお仕事はもう終ったの」

「ああ、今日の午前中で終ったよ」

「お疲れさま。お父さんが電話をくれるなんて珍しいじゃない。また具合でも悪いの」

「あまりかんばしくないのだよ。例の耳鳴りが治らなくてね。だんだん幻聴の程度がひどくなっているみたいなんだ」

「だからいったでしょう、神経科のクリニックでも早く診てもらわないとだめだって。このあいだは帰ってしまったみたいね。先生に聞いたわよ。私は少し腹がたったけど、しょうがないなあと思っていた。今はカウンセリングもそうだし、お薬も昔よりずっといいものが出ているって」

「おまえのいうとおりだ。それで電話したんだ。明日にでもあらためて病院に行くつもりだよ。このあいだ先生に勧められた心療内科で本格的に治療に打ち込もうと思っている。リカが大きくなるのをちゃんと見届けないとならないし」
「そうよ、お母さんの分まで長生きしてくれないと困るわ」
「わかっているさ」
　電話口で子猫が鳴き、孫娘のはしゃぐ声が聞こえていた。私はなぜか、その声を聞いていて胸の中から突き上げるような熱い思いに身ぶるいし、あふれる涙を止められなかった。
「お父さんどうしたの」
「何でもないよ。鼻がつまっただけだ」
「そうなの？　明日は病院に付き添うからね。今から連絡しておけば仕事を変わってもらえると思うの」
「ひとりで行けるから心配ない。いつもどおり勤めに行きなさい。急にいわれたら困る人が出るだろう」
「そうだけど、ほんとにいいの？」
　私は大丈夫だといって電話を切った。娘は結婚してから二度の流産を繰り返し、七年目にしてやっと女の子を出産した。いつも苦虫を潰したような顔をしていることが多い私も、この子の瞳に見つめられると自然に心が軽くなる。その初孫の成長を妻は誰よりも楽しみにしていた。
　翌日の空は晴れわたり、かすかに見える高い雲は春の盛りが到来していることを感じさせた。昨日まで霞んでいた瀬戸内海の島々は若々しい緑にあふれ、くっきりとした稜線を見せている。そんな景色を窓辺に見ながら、いつまでもこんな自分ではだめだと言い聞かせた。娘から電話があったのはそのすぐあとだった。
「お父さん、おはよう。やっぱり心配だから病院に一緒に行くわ」
「大丈夫だといったじゃないか」
「もう休みを取ったのよ。お父さん八時七分の電車に乗れる？」
「ああ、乗れるよ」
「私は笠岡から四十四分に乗り込むから、何両目に乗ったかメールしてね」
　私は苦笑しながら電話を切ったが、悪くない気分だった。コーヒーを飲んで身繕いをととのえ、七時半には細い坂道を下って尾道駅へ向かって歩いていた。水路を行き交う商船の上を海鳥たちが群れをなして翔んでいる。彼らは何のためらいも気負いもなく季節の息吹を体いっぱいに浴びていた。
　空と水の光に存分に包まれながら鳥たちを乗せた汽船は、白い澪をひきながら通り過ぎていった。福山を過ぎたころから車窓の景色を眺めた。吉田川を越えて笠岡市にある報恩寺が現れたとき、私は孫娘が通っている幼稚園のある方角を見ようとして、ガラスにひたいが触れるほどに首を伸ばしていた。

了